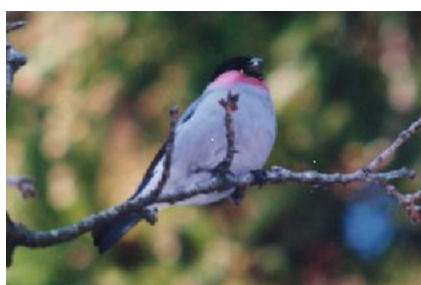


名前で損

1. ウソ

雪の上に小さなゴミが散乱している場所があればサクラの木の下であり、フイフイと口笛を吹くような音が聞こえるかもしれません。早い年では11月から、遅い年には3月になってやってくる冬鳥のウソです。

雄は頭、翼、尾が黒色で頬の紅以外は灰色をしています。雌は頭、翼、尾以外が灰褐色です。時には雄の胸まで赤い亜種が混じっていることもあります。黒い嘴(くちばし)は短くて太く、かたい種子を食べる鳥の仲間に通じるものです。エノキやムクノキの



ウソ

実を食べている時にはパチッ、パチッという音がよく聞こえます。しかし、この音だけでウソが来ていると決めてはいけません。同じ仲間のイカル(倉吉ではマメマシ)やシメも同じ実を食べて同じ音をたてます。

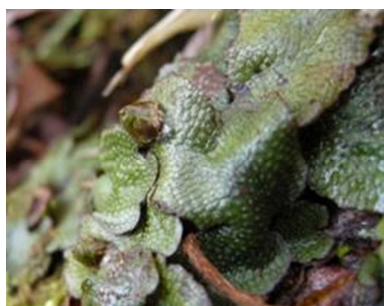
サクラの花芽を食べて芽鱗を下にまき散らすのですが、よく食べられるサクラはソメイヨシノです。花芽の数も多く、一芽の中の柔らかい花が多いため好まれるのです。同じ好みで果樹園のナシの花も大好物です。追われて植栽のサクラに来ているので許してやりましょう。



ウソがまき散らした芽鱗

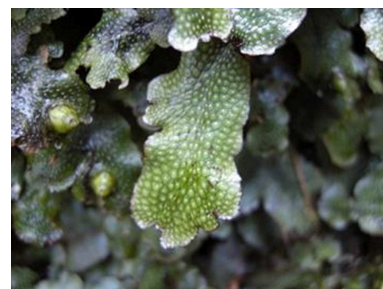
2. ジャゴケ

私たちが通常見ているものが、写真のような葉状をしている苔です。表面の模様から命名されたもので、ヘビの鱗を想像させるところからきています。手で揉むとマツタケの匂いがします。



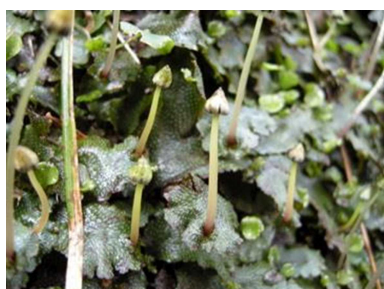
若い雌器托をつけた葉状体

水分とある程度の明るさを必要としますので、日が射す遊歩道の山側法面で目立ちます。落ち葉の下に入った雨水が傾斜した土面を流下し、工事で切られた法面に流れ出すところは年中湿っているからです。



ジャゴケの葉状体

3月、葉状の上に付いている秋にできた円錐形のものが、1週間も見ないでいると写真のように半透明の弱々しい柄の上のついたキノコのような状態になります。円錐体は孢子囊(のう)を下側につける台(雌器托)で、のっている葉状体は雌株だったのです。精子を作る雄株にはこのようなものはできません。



ジャゴケの雌器托

光合成はするのですが、高等な植物のように気孔はなく、鱗状に見える区切りごとに白く見える気室の上面中央に入り口の穴があります。気孔のように開閉できません。

(倉吉博物館専門委員 國本洸紀 2014)